

日本語とシンハラ語、タミル語の対照研究

A Contrastive Study of Syntax in Japanese, Sinhalese and Tamil

鈴木 互
Wataru SUZUKI

0 はじめに

本稿は、現代における日本語とシンハラ語、タミル語を共時的に対照することを目的としている。

角田（1991：265-290）は、世界の130の言語の「語順の表」をまとめている。これは角田（1991：3-28）で分析した、19の項目についてのまとめである。

この中に日本語とタミル語の分析がある。これにシンハラ語の分析を加えると、次のような表を得る。日本語と同じ語順のものを＋、異なるものを－としている。

表0-1 「日本語とシンハラ語、タミル語の語順の表」

	日本語	シンハラ語	タミル語
1 S、O と V	SOV など	SOV など	SOV など
2 名詞と側置詞	+	+	+
3 所有格と名詞	+	+	+
4 指示詞と名詞	+	+	+
5 数詞と名詞	+	+ (-)	+
6 形容詞と名詞	+	+	+
7 関係詞と名詞	+	+	+ ; その他
8 固有名詞と普通名詞	+	+	+
9 比較の表現	+	+	+
10 本動詞と助動詞	+	+	+
11 副詞と動詞	V の前	V の前	V の前
12 副詞と形容詞	+	+	+
13 疑問の印	文末	文末; 質問の焦点 の直後	文末; 質問の焦点 の直後
14 一般疑問文での S、V 倒置	無し	無し	無し
15 疑問詞	平叙文式	平叙文式	平叙文式
16 特殊疑問文での S、V 倒置	無し	無し	無し
17 否定の印	動詞語尾	動詞語尾	動詞語尾
18 条件節と主節	+	+	+
19 目的節と主節	+	+	+

シンハラ語における「5 数詞と名詞」の語順は基本的には日本語と同じだが、単位をつけた場合に、(0-1) のように「名詞 (単位呼称) + 数詞」の語順になる (丹野 (2005 : 97-99) 参照)。

(0-1) rupijəl pahəji sətə pənəhəji

ルピヤル パハイ サタ パナハイ

ルピー 5 セント 50 (→5ルピー=50セント)

言語類型論的に見て、語族として不明な日本語、多くの言語の影響を受けているシンハラ語、ドラヴィダ語族のタミル語が、表0-1を見ると非常に似た傾向があることが分かる。しかし、それ以外に文法的な相違はないであろうか。

1 分析

上記の語順以外にも、例えば、強調のための倒置、疑問における係り結び、主語の省略、語順の自由な変化など、日本語・シンハラ語・タミル語に共通する文法的特徴は多い。しかしながら、より仔細に検討するといくつかの点で異同が見出される。以下では3言語間で特に異同が観察されるものについて分析した。

1) 書き言葉と話し言葉

(1-1) のように、日本語とシンハラ語は、書き言葉と話し言葉が基本的に対応している。表記されている通りに発音すればいい。

一方、(1-2) のように、タミル語は書き言葉と話し言葉が著しく異なっている。袋井他(2007:155)には、故・M・シャンムガン・ピッライ博士の「タミル語は〈書き言葉〉と〈話し言葉〉の間に大きな差がある。時にそれらは違う言語であるかのようだ」という言葉が紹介されている。本稿では、タミル語は書き言葉の綴りを記した。「日」は日本語、「シ」はシンハラ語、「タ」はタミル語の省略である。

(1-1) 日: *watashi wa nihongo o hanasimasu.*

私は 日本語を 話します

シ: *mamə sin:halə kaθha:kəṛəṇəvai.*

ママ シンハラ カターカラナワ

私(は) シンハラ語(を) 話します

(1-2) タ: *aval tamilil pesinal*

アヴァ タミルレ ペーシナー

彼女(は) タミル語で 話しました

2) 音節

(1-1) のように、日本語は、「子音+母音」という開音節(つまり、母音で終わる)であり、シンハラ語も同じである。一方(1-2)のように、タミル語は基本的に子音で終わる閉音節である。

3) 鼻濁音

シンハラ語における[ŋa]の子音は鼻濁音である。日本語にも、たとえば「おながく」の「が」のように[ŋa]という鼻濁音が存在する。一方、丹野(2009:263)によれば、ヒンディー語やタミル語には存在しないとされている。

4) 身体表現

身体表現については、シンハラ語は丹野（2005:61）に、またタミル語は袋井他（2007:124）にまとめられている。対応を確認してみたい。なお、日本語については、ローマ字表記を併せて記し、シンハラ語は発音を記した。タミル語のローマ字表記は書き言葉で、カタカナは話し言葉を示す。以下同じ。

表1-1 「日本語とシンハラ語、タミル語の身体表現」

日本語	シンハラ語	タミル語
毛 (ke)	ke: (ケー) など	mudi (ムディ)
鼻 (hana)	nahaja (ナハヤ)	mukku (ムーク)
肩 (kata)	kara (カラ)	tol (トール)
口 (kuti)	kata (カタ)	vay (ヴァーイ)
手 (te)	aṭṭa (アタ)	kai (カイ)
肌 (hada)	hama (ハマ)	tol (トール)
腹 (hara)	bada (バダ)	vayiru (ヴァイル)
膝 (hiza)	ḍanadisa (ダナヒサ)	mulangal (ムランガール)
足 (asi)	adi (アディ)	padam (パードン)

丹野（2009:273-274）でシンハラ語の身体表現について触れて、「古代日本語で『あた（咫）』と言えば手を使った長さの単位だが、シンハラ語でもアタは手であり、長さの単位でもある」とその共通性を示している。また、「精神をシンハラ語ではアートウマ（野口（1993:67）では、「アートゥマーヤ」[atmaya]を精神としている——引用者注）というが、これは『あたま』と発音が似ている」とも述べている。

身体表現について、日本語とタミル語との間に類縁性は読み取れないが、日本語とシンハラ語の単語には音韻的にみて似ている点があると言えよう。

なお、丹野（2005:113-114）には、シンハラ語における「日本語とよく似た響きの単語群」として、「かまわない」と「kaman næ: (カマン ネー——引用者)」や「神」と「kami (カミ)」など33の例が挙げられている。

5) 指示語

日本語の指示語の体系は、①「コ（近称）」②「ソ（中称）」③「ア（遠称）」の三つに分かれている。さらに「ド」の体系もあるが3言語に共通なのでここでは扱わない。

丹野（2005:62-65）によれば、シンハラ語の指示語の体系は、次のようになっている。ここでは、「対象」を指し示すものを例にあげる。

- ①「これ」（指示するものが話者のちかくにある場合）
- ②「それ」（指示するものが相手側にある場合）
- ③「あれ」（指示するものが話者・相手から離れているが、見える場合）
- ④「あれ・それ」（指示するものが見えない場合、会話で言及されたもの）

またそれぞれについて、単数と複数に分かれている。以上をまとめると次のようになる。

表1-2 「シンハラ語の指示語（対象）」

	単数	複数
①これ	me:kə（メーカ）	me:va（メーフ）
②それ	o:kə（オーカ）	o:va（オーワ）
③あれ	əɾəkə（アラカ）	əɾəva:（アラワ）
④あれ・それ	e:kə（エーカ）	e:va:（エーフ）

この体系は、「対象」の他に「例示」「場所」「方向」「程度」にも適用される。

袋井他（2007:95-96）によれば、タミル語の指示語の体系は、次のようになっている。

- ①「これ」（話者や聞き手から近い事物を示す）
- ②「あれ・それ」（話者からも聞き手からも遠い事物を示す。あるいは、話者からは遠く、聞き手からは近い事物を示す）

表1-3 「タミル語の指示語（対象）」

	マーカ	単語
①これ	-i	idu
②あれ・それ	-a	adu

この体系は、「対象」の他に「例示」「場所」「様態・程度」にも適用される。

以上をまとめると表1-4になる。

表1-4 「日本語とシンハラ語、タミル語の指示語の体系」

	これ	それ	あれ	それ・あれ
日本語	+	+	+	
シンハラ語	+	+	+	+
タミル語	+			+

指示語については、シンハラ語の4体系が、日本語の3体系やタミル語の2体系を含んでいることが分かる。

6) 後置詞

側置詞のうち名詞（句）や動詞（句）等に後接して他の語（句）との関係を形成するものが後置詞である。このうち名詞（句）に後接するものは、文中の他の語句との関係で「格」を形成する。日本語では不変化の助詞が、シンハラ語ではニパータと呼ばれる不変化詞が担っている。またこれらの後置詞は概ね、日本語で言えば「格助詞」「副助詞」「接続助詞」などに相当する特徴を備えている。

一方タミル語の接辞も、普通名詞に後置される場合は、日本語の助詞やシンハラ語のニパータに似た振る舞いをするが、大きく異なるのは人称代名詞の場合に屈折語に似た振る舞いとなることである。

格の名称は、角田（1991:167）などを参照した。Φは「ゼロ記号」が対応していることを示す。空欄は対応する形がない（他の形式が代用していることもある）ことを示す。

表1-5 「日本語とシンハラ語、タミル語の後置詞」

文法的範疇・意味	日本語の助詞	シンハラ語のニパータ	タミル語の接辞
主格	ga	Φ	Φ
対格	o	Φ, tʃa (1人称のみ)	ai
与格・所格	ni	tə	kku,
奪格	kara	gen:, pətən:	
仲間格	to	səmægə, səhə	odu, um
所格 (場格)・道具格	de	ði:	il, idam
基点	yorī	nin:	
比較	yorī	vada:θ	vida
到達点	made	vanaθuru, ðəkva:	
方向格	e	tə	kku
所有格	no	ge:	udaiya
疑問の印	ka	ðə	a
限定	dake	pəmənək	mattun
様態	yoonā, yooni	vəge:	pola, pol
並列・列挙	mo	θ	um
主題	wa	vənə	
強調	koso	nəm, ma	
確認	ne	ne, ne:	

袋井他（2007：85, 86, 89, 93）によれば、タミル語の人称代名詞の屈折語尾は以下ようになる。人称代名詞が、人称・性・数に応じて変化していることが分かる。袋井他（2007：91-94）によれば、「場格」は場所等を示して「～に（おいて）」「～で」を示しているので、通常「所格」や「地格」と呼ばれているものに相当する。無生物には「il（レ）」が、生物には「idam」が語尾となるとされる。人称代名詞なので、以下では「idam」が使われている。表中の「m」は男性、「f」は女性、「m/f」は男女共通、「n」は中性を表している。

表1-6 「タミル語の人称代名詞の屈折」

「単数」

	1人称	2人称	3人称
主格	nan	ni	avan (m) aval (f) avar (m/f) adu (n)
対格	ennai	unnai	avanai (m) avalai (f) avarai (m/f) adai (n)
与格	enakku	unakku	avanukku (m) avalukku (f) avarukku (m/f) adukku (n)
場格 (所格・地格)	ennidam	unnidam	avanidam (m) avalidam (f) avaridam (n)

「複数」

	1人称	2人称	3人称
主格	nangal	ningal	avargal
対格	engalai	ungalai	avargalai
与格	engalukku	ungalukku	avargalukku
場格 (所格・地格)	engalidam	ungalidam	avargalidam

表1-6の、例えば1人称単数主格「nan」において、対格・与格・場格がそれぞれ「*nan-ai」「*nan-u-kku (u は音の調整)」「*nan-idam」とでもなっているならば、タミル語の人称代名詞の屈折語尾も不変詞的といえるが、そうはなっていない (*は存在しない表現を表す)。

7) 動詞の活用

動詞の活用においても、日本語とシンハラ語は似た活用の仕方をする。基本的には「語幹」＋「活用語尾」である。それに「ゼロ記号」を含む「後接語」がついて文が完成する。丹野（2005：72）を参照して、以下のような日本語とシンハラ語の動詞の活用の対応を確認することができる。一般にシンハラ語には「命令形」が存在しない。Φは存在しないことを示し、「mu」は「勧誘」の意味を示す（丹野（2005：131）参照。日本語の古語の「意志・希

望」の助動詞「む」と似ている)。

表1-7 「日本語とシンハラ語の動詞の活用」
(「飲む」と「bonava: (ボナワ)」の場合)

日本語			シンハラ語		
語幹	活用語尾	(後接語)	語幹	活用語尾	(後接語)
nom-	a	nai	bo-	nne	næ:
	i	tai		nna	a:saji
	u	o		nava:	.
	u	toki		na	vita
	e	ba		nava:	nam
	o	o		Φ	mu

一方タミル語の動詞の末尾は、これらとは異なって、次のような人称・性・数によって活用する。袋井他(2007: 97)に基づいて整理してみる。

表1-8 「タミル語の動詞の活用語尾」

	1人称	2人称	3人称
単数	-en	-ay	(m)-an, (f)-al, (m/f)-ar, (n)-adu
複数	-om	-irgal	(m/f)-argal, (n)-ana

また、タミル語の動詞は、「kka で終わるもの」と「kka で終わらないもの」に大きく分けられる。それに応じて、現在形、未来形の作り方が異なる。また、過去分詞の形態によって過去形の作り方が異なる。まとめると以下のようになる。「活用語尾」とは表1-8の人称・性・数による活用語尾のことである。

表1-9 「タミル語の時制の活用形」

	kka で終わるもの	kka で終わらないもの
現在形	不定形 + ir + 活用語尾	語幹 + gir + 活用語尾
未来形	語幹 + pp + 活用語尾	語幹 + v + 活用語尾
	過去分詞が i で終わらないもの	過去分詞が i で終わるもの
過去形	過去分詞 + 活用語尾	過去分詞 + n + 活用語尾

以上から、日本語とシンハラ語の動詞の活用が似ているのに対して、これらとタミル語の動詞の活用が大きく異なっていることが分かる。

8) 時制

日本語とシンハラ語の時制（「テンス」）は、「過去形」と「非過去形」からなる。一方、タミル語は7) にも示したように「過去形」「現在形」「未来形」からなっている。「完了」はアスペクトなので、ここでは扱わない。

9) 主語の人称・性・数と動詞の活用的一致

7) で示したように、日本語とシンハラ語には、主語の人称・性・数と動詞の活用的一致はない。一方タミル語にはこの一致がある。

10) 「いる」と「ある」の区別

日本語とシンハラ語には、「いる」と「ある」の区別がある。この区別は、両言語ともに基本的には主語が生物か無生物かに応じている（動態的か静態的に応じると見ることもできる）。一方タミル語にはこの区別がない。9) と10) の関係は以下のように相補的である。

表1-10 「日本語とシンハラ語、タミル語の主語と動詞の対応関係」

	主語の人称・性・数と動詞の活用的一致	「いる」と「ある」の区別
日本語・シンハラ語	－	＋
タミル語	＋	－

このことは、日本語やシンハラ語は、主語が生物か無生物かに着目するのに対して、タミル語は主語の人称・性・数に着目すると考えることができる。

11) 与格主語による無意志動詞文

3つの言語とも、主語を与格で示すことがある。以下の例文中「に」で記されているのが与格である。

(1-3) 日：私には港が見える。

シ：mata vara:ja pe:ruwa

私には 港（が） 見える

(1-4) シ : mata badaginiyi

私に 空腹だ (→私は空腹だ)

シ : mata ridenawaa

私に 痛む (→私は痛い)

(1-5) タ : engalukku indap pudavai pidittirukkiradu

私たちに この サリー (が) 気に入りました

(→私たちはこのサリーが気に入りました)

タ : enakkut talai valikkiradu

私に 頭が 痛い (→私は頭が痛い)

(1-3) のように、日本語では、「見る」「思う」に対して「見える」「思える」という動詞は与格主語を取ることができる。主に認識を表す動詞と言える。シンハラ語でも同様な文型を取ることができる。丹野 (2009 : 267-269) などによれば、このような文型は「無意志動詞 (ニルットサーハカ) 文」と呼ばれているという。

ちなみに、丹野も示しているように、「見る」「思う」を他動詞文とし、「見える」「思える」を自動詞文とする欧米系の学者もいるが、無意思動詞文は自動詞文ではない。主語 (与格) と目的語 (主格) を含む (日本語学ふうと言えば、「ニーガ構文」をとる) からである。

以下のような文を考えて、名詞 (句) に対して、文法機能 (主語・目的語・補語など)、意味役割 (動作者・対象・場所など)、格 (主格・対格・与格・斜格など) という3つのレベルで考えると次のようになる。この3レベルの詳しい区別については、角田 (1991 : 167以下) を参照。

(1-6) a He broke the window.

主語 目的語

動作者 対象

主格 対格

b The window was broken by him.

主語 補語

対象 動作者

主格 斜格

c The window broke.

主語

対象

主格

(1-6) で、a は他動詞文、c は自動詞文といえる。それに対して、b はそれらの中間的な他動性を担っていて、無意思動詞文はこの特徴に近いと言えるかもしれない。ちなみに、その特徴は「彼に窓が壊された。」という日本語訳（ニーガ構文）に反映している。

(1-4) のようにシンハラ語では、生理的感覚などを与格主語で表すことができる。しかし日本語ではこのような表現はしない。

また、タミル語でも (1-5) のように、感情や生理的感覚、認知や理解を表すことができる（袋井他（2007:35-47, 87-88）など）。また、この場合、動詞は3人称・単数形をとるとされる（袋井他（2007:44）など）。しかし、タミル語においては、(1-3) のような認識を示す用法は見当たらないようである。

すると、これらの3言語の与格主語には次のような分布が認められるといえる。

表1-11 「日本語とシンハラ語、タミル語の与格主語文の分布」

	認識を表す文（無意志動詞文）	感覚・感情を表す文
日本語	+	－
シンハラ語	+	+
タミル語	－	+

それぞれの言語の与格主語文の分布にはズレがあるといえる。与格主語による無意思動詞文が可能なのは日本語とシンハラ語で、タミル語はそうではないと言える。

2 まとめ

1の分析結果をまとめると表2-1のようになる。ここで、日本語と同じ特徴を持つものに＋印を、そうでないものには－印を付け、中間的なものには＋－の印を付けた。

表2-1 「日本語とシンハラ語、タミル語の文法的な異同」

	日本語	シンハラ語	タミル語
1) 書き言葉と話し言葉	+	+	－
2) 音節	+	+	－
3) 鼻濁音	+	+	－
4) 身体表現（日本語との対応）	+	＋－	－
5) 指示語	＋（3体系）	＋－（4体系）	＋－（2体系）
6) 後置詞	+	+	＋－
7) 動詞の活用	＋（語幹＋活用語尾）	+	－
8) 時制	＋（2時制）	+	－（3時制）
9) 主語の人称・性・数と動詞の一致	+	+	－
10) 「いる／ある」の区別	+	+	－
11) 与格主語による無意志動詞文	+	+	－

3 結論と考察

表0-1で示したように、日本語とシンハラ語、タミル語の「語順」は、非常に似た傾向を持っているが、より仔細に分析すると、表2-1に見られるように「日本語とシンハラ語の関係は、日本語とタミル語の関係よりはるかに密接である」ことが分かった。

日本語とタミル語の類縁関係を通時的に分析する立場（「日本語＝タミル語クレオール説」とも言われる）とは異なり、本稿では、現代の日本語とシンハラ語、タミル語の共時的な対照分析を行った。3つの言語の通時的な展開は複雑だが、共時的に見るとその異同は見やすくなる。日本語とシンハラ語の文法的な類似関係は、今後言語類型論的な分析に寄与しうるのはないかと考えられる。シンハラ語の研究はまだ緒についたばかりである^(注1)。今後さらに研究を深める価値があると思われる。

4 注

- 1 現在のところ、丹野（2009：276）によれば、日本人による「シンハラ語」の研究として以下のような著作が挙げられている。

岸本秀樹（1992）“LF Pied piping; Evidence from Sinhara”

渡辺明（2001）“Loss of Overt Wh-Movement in Old Japanese and Demise of “Kakarimusubi””

宮岸哲也の一連の論文

しかし、管見では、「日本語とシンハラ語、タミル語」に関する対照研究は、今のところ本稿を除いて見当たらない。

5 参考文献

- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
野口忠司（1984）『シンハラ語の入門』大学書林
野口忠司（1993）『シンハラ語辞典』大学書林
丹野富雄（2005）『シンハラ語の話し方』南船北馬舎
丹野富雄（2009）『日本語＝シンハラ語小辞典』かしゃぐら通信
袋井由希子、カルパナ・ジョイ（2007）『タミル語入門』南船北馬舎
石井米雄編（2008）『世界のことば・辞書の辞典 アジア編』三省堂
T. Burrow and M. B. Emeneau（1984）“A Dravidian Etymological Dictionary Second Edition” Oxford University Press, New York